

位置と環境

遺跡は鹿屋市の北西部にあり、市の中心部から西へ約4kmのところの所に在り、標高約110mの台地に位置している。東側は山地で、北側は比高差25mもある深い谷が入り込んでいる。海岸線までは、西側へ約3.5kmのところの所に在り、北側及び東側は高隈山から連なる険しい山地である。

縄文時代の遺跡の立地としては、周辺が森林で食料の確保が容易であったこと、また、深い谷が入り組んでいるために湧水が多く、水の確保にも便利な場所であったと考えられる。

周辺には、鹿屋バイパス路線内だけでも、榎田下遺跡・中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡・中原山野遺跡・前畑遺跡・榎崎A遺跡・榎崎B遺跡・西丸尾遺跡・西丸尾B遺跡など、旧石器時代から弥生・古墳時代までを中心とする数多くの遺跡が所在している。

調査の経緯

昭和53年には、建設省九州地方建設局（現、国土交通省）により、一般国道220号鹿屋バイパスの建設が計画された。これを受けて、鹿児島県教育委員会では、当該路線内の分布調査や確認調査を実施した。郷ノ原～白水地区については、昭和61年に分布調査、昭和62年に確認調査を実施した。その結果、飯盛ヶ岡遺跡・榎木崎A・榎木崎B・西丸尾遺跡の存在が判明した。

そこで、平成元年度に本遺跡は、建設省大隅工事事務所の委託により、鹿児島県教育委員会が本調査（約6,000m²）を実施した。

遺構と遺物

発掘調査では、縄文時代及び弥生時代の遺構・遺物が発見された。

縄文時代早期には、石器の集積遺構2か所及び多数の集石遺構が検出された。また、土器は石坂式土器・平椀式土器・塞ノ神式土器を中心に、数多くの型式の土器が出土している。

・集石遺構

集石遺構は、縄文早期の遺物包含層（V層）から



第1図 飯盛ヶ岡遺跡の位置

126基が検出されている。この集石遺構の形態は、A：掘り込みを有する、B：掘り込みを有しないものと分類される。さらに、a：礫が密集しているもの、b：礫がやや密集しているもの、c：礫がまばらなものに細分される。これらをまとめたのが以下の表である。

A-a 類	掘り込み有，礫密集	15基
A-ac 類	掘り込み有，礫密集部とまばらな部分	3基
B-a 類	掘り込み無，礫密集	29基
B-ab 類	掘り込み無，礫密集部とやや密集	1基
B-ac 類	掘り込み無，礫密集部とまばらな部分	3基
B-b 類	掘り込み無，礫やや密集	35基
B-bc 類	掘り込み無，礫やや密集とまばらな部分	1基
B-c 類	掘り込み無，礫まばら	38基

第1表 集石遺構分類表

大半が掘り込みを有しないものであり、A-ac 類、B-ac 類、B-bc 類は、礫の密集した部分とまばらな部分とからなるものであり、あたかも礫を掻き出したかのようなものである。また、2基の集石遺構が接近した状態にあるものがある。これらは、A-ac 類、B-ac 類において密集した部分とまばらな部分とからなるものと同様に、礫を掻き出すことにより2つの集石遺構になったようにも観察される。

近年の研究では、これらの集石遺構は石蒸し料理



写真1 集石遺構の検出状況

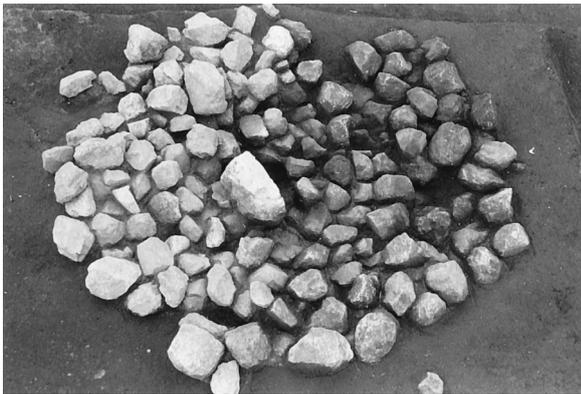


写真2 掘り込みのある集石遺構



写真3 まばらな導石



写真4 まばらな集石



写真5 掘り込みのない集石遺構

に用いられたと考えられているものであり、遺跡内におけるその分布を見てみると北側へ傾斜している部分にやや密集している傾向にある。つまり、平坦部の生活空間を避けて、傾斜地に調理場（集石）を設けたものではなかろうか。

この集石遺構の時期については、縄文時代早期ではあるものの、同一遺物包含層より、数多くの型式の土器が出土している。そのことから、ある一時期に集中して石蒸しが行われていたのか、縄文時代早期全般を通じて石蒸し料理が行われていたのか定かでない。

・石器の集積遺構

本遺跡は、石斧状の石器と磨石が一括して出土した箇所が、それぞれ一か所ずつ検出された。

石斧状の石器が、写真6のようにホルンフェルス製の石器が5本立ったような状態でまとまって出土した。その石器の内容は、大型の石斧状の石器や側縁に刃部を有すると思われるスクレイパー状のものである。

石斧状の石器は、最大長約18cm・最大幅約8cm、最大長約19cm・最大幅約12cm、最大長約21cm・最大幅約10cmの3本で、縄文時代晩期の扁平打製石斧を思わせるようなものであるが、刃部の調整は不十分であったり、粗かったりしている。

スクレイパー状の石器2本は、最大長約18cm・最大幅約8cm、最大長約8.7cm・最大幅約16cmで、ともに明瞭な刃部を形成しているものではない。

磨石の一括して検出されたものは、写真7のように4個の磨石が重なったような状態でともに石材は

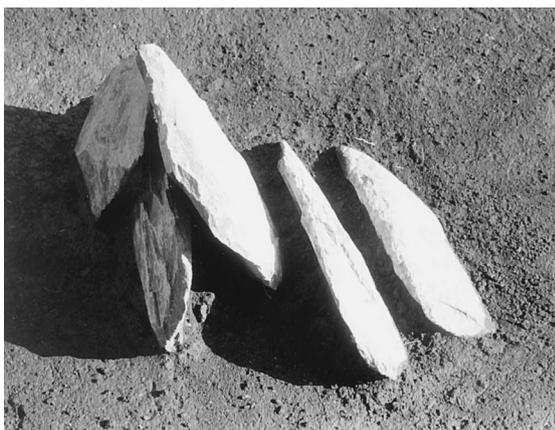


写真6 石器集積遺構1



写真7 石器集積遺構2

安山岩である。最大長が約12cm、最大幅が約10cm程度で、全面に丁寧な磨面が見られ、敲打痕はなく磨石として用いられていたものと思われる。

・縄文時代早期の土器（第2図）

縄文時代早期の土器は、第V層の茶褐色粘質土と第VI層の黒褐色土から出土した。

縄文時代早期前葉の土器は、前平式土器、吉田式土器、石坂式土器などが出土しているが、その出土量は多くない。1は、その中でも出土量の多かった石坂式土器で、口縁部に貝殻腹縁による刺突、胴部には綾杉状の貝殻条痕が施されているものである。

早期中葉から後葉の土器は、苦浜式土器、下剝峯タイプ、桑ノ丸Ⅲ類土器、押型文土器、変形撚糸文土器、平椀式土器や塞ノ神式土器など、数多くの型式の土器が出土している。

2は、種子島で発見されている苦浜式土器と思われるものであるが、本遺跡での出土量は多くない。

4は、押型文土器で、この土器には、山形や楕円の押型文が見られ、変形撚糸文については、変形撚糸文と押型文の両方が施文されている可能性のあるものもある。

5～9は、本遺跡で最も出土量の多かった平椀式土器、塞ノ神A式土器、塞ノ神B式土器など早期後葉の土器である

9は、口縁部がラッパ状に外反し、胴部が張り、沈線・刺突・縄文・結節縄文など豊富な文様で華麗に装飾される平椀式土器である。

5・6は、平椀式土器と同様に口縁部がラッパ状に外反するものであるが、胴部に沈線、刺突文や撚

糸文等を施す塞ノ神A式土器である。また、7・8は、貝殻条痕文や貝殻刺突文などの施文を主体とする塞ノ神B式土器である。

特徴

数多くの集石遺構が検出され、その形態の多様さと遺跡内の広がりから、縄文時代早期の調理施設のあり方について知ることができる。

また、多型式の土器が出土していることは、南九州における縄文時代早期の土器編年を考える上で、貴重な資料であるといえる。

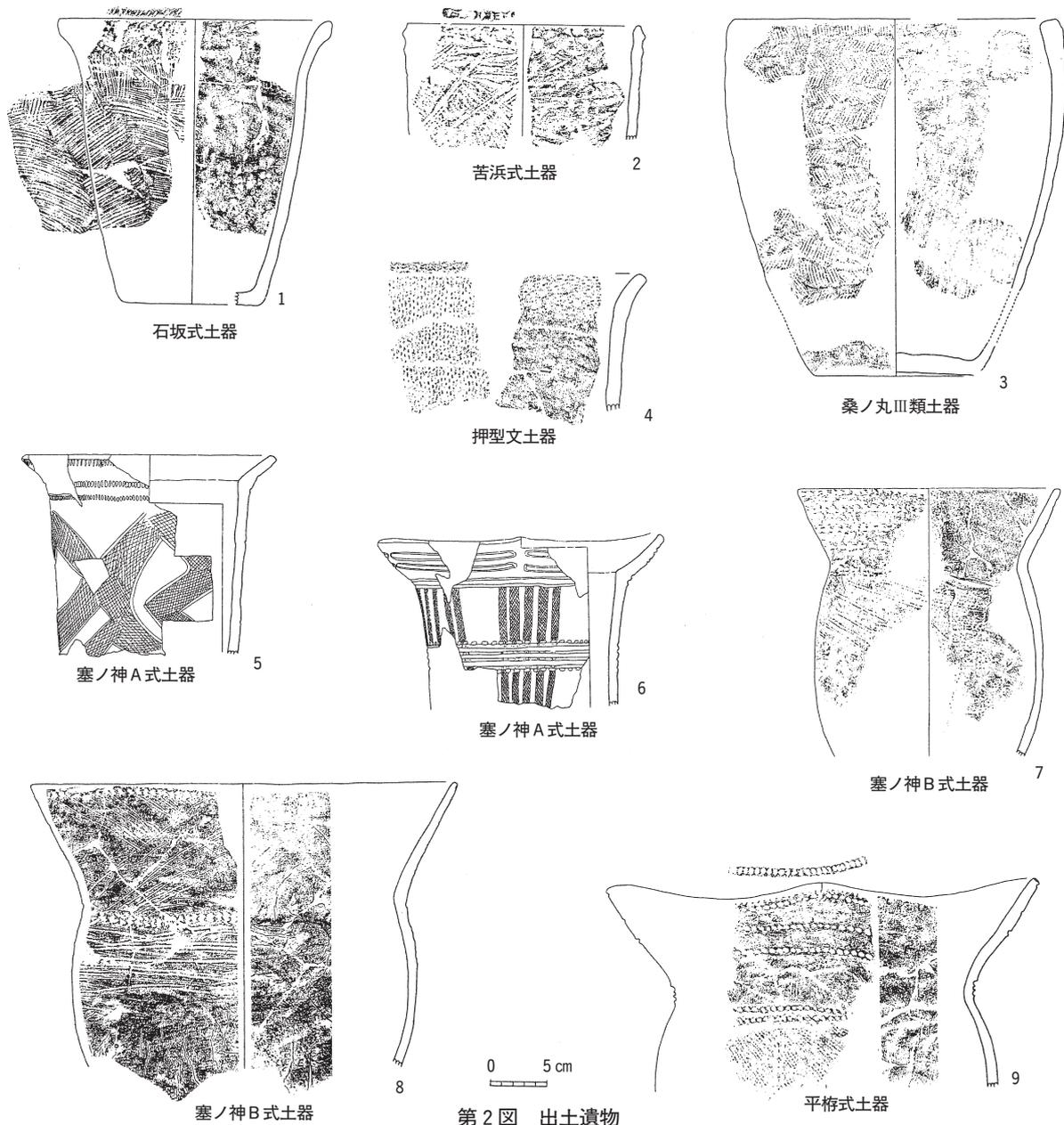
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター1993「飯盛ヶ岡遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』3

(鶴田静彦)



第2図 出土遺物